

賑わいのための足場

正会員 ○中川陽香*
 正会員 岡松道雄**
 正会員 宋 俊煥***

* 山口大学大学院創成科学研究科 修士課程
 ** 山口大学大学院創成科学研究科 教授・博士（工学）(*設計指導)
 *** 山口大学大学院創成科学研究科 准教授・博士（環境学）(*設計指導)

Scaffolding for liveliness

○NAKAGAWA Haruka*
 OKAMATU Mitio**
 SONG Junhwan***

* Graduate Student, Department of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ.
 ** Prof. Yamaguchi Univ. (*Adviser)
 *** Associate Prof. Yamaguchi Univ. (*Adviser)

1. 計画の背景と目的

近年、地方都市中心部の駅や商店街の衰退が見られ、長崎県佐世保市の中心部に位置する「三ヶ町・四ヶ町商店街」もそのひとつである。この商店街は2006年中小企業庁より「にぎわいあふれる商店街」に選出され「20万都市で最も元気な商店街」と言われてきたものの、佐世保市商工会議所が1985年から行っている通行量調査では佐世保市の人口減少よりも大きい変化率で商店街内の通行量が減少傾向にある。また、2017年と2018年の調査当日に海外からのクルーズ船が来航していたが通行量に影響は見られなかった。佐世保市を訪れる観光客の約半数はハウステンボスを目的としていることが明らかになっており、佐世保市の魅力を観光資源としてうまく活用できていないのが現状として見られた。そこで本提案では、佐世保市の日常（商店街）と観光に着目し、これらを連携させることで課題解決と継続的な賑わいの可能性を見出す。

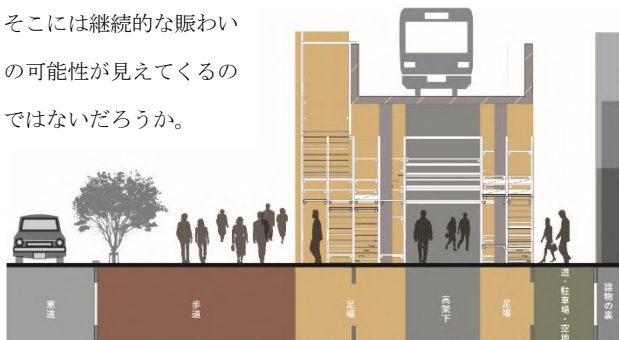
2. 計画概要

2.1 計画概要

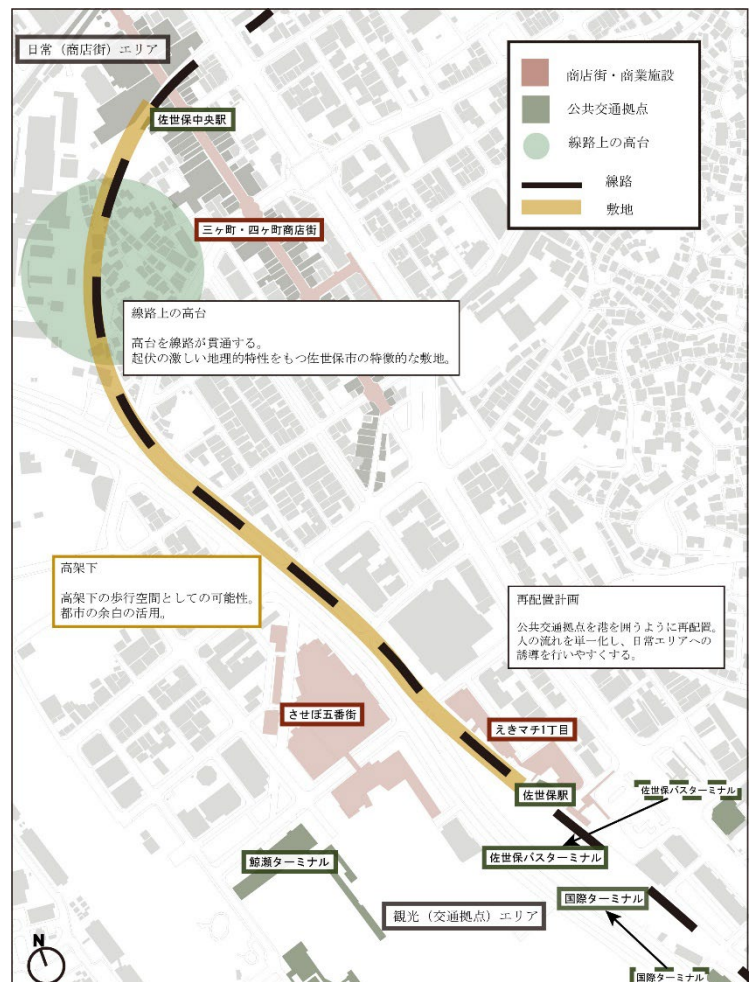
佐世保のまちを再建する（賑わいを取り戻す）手段として足場を用いる。佐世保駅から佐世保中央駅間の沿線に足場を組み機能を加えることで、観光交通拠点エリアと日常エリアの連携を図る。商店街は観光による人の流れで賑わいを取り戻す。また観光客は佐世保市の本来の魅力に触れることができる。

高台ではピクスケールへ拡大した足場を組み、そこに展望の機能を加える。高架下では、高架下とまちの境目に足場を組み、高架下に接する土地は空き地・駐車場・建物の裏等であり、変容の可能性を持つ。賑わいが戻り始め、空き地に店舗が入ると足場が店舗への新たな接続手段へと変形する。駐車場が公園になればそこへ広がり機能を加える。建物の裏がファサードになり動線の妨げになるようであれば解体される。人々は、足場によって可視化されたまちの再建過程を体感しどのようにまちが変化し、何が起きるのか、まちへの関心が高まる。そしていずれはこの場を拠点にまち全体に人が広がって行く。

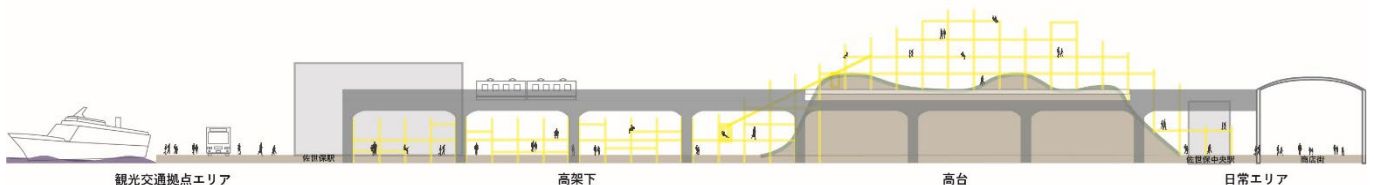
そこには継続的な賑わいの可能性が見えてくるのではないだろうか。



2.2 敷地



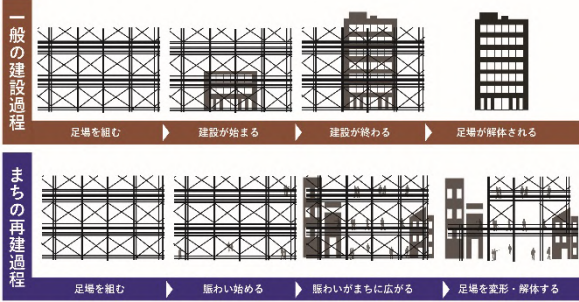
敷地は長崎県佐世保市中心部の駅、商店街周辺エリア。佐世保駅と商店街の最寄り駅である佐世保中央駅間の沿線。高架下と、線路上の高台。



所在地：長崎県佐世保市 佐世保駅 - 佐世保中央駅間の沿線
 主な用途：歩行兼滞留空間
 キーワード：高架下・足場・滞留・都市

Location : Sasebo Station-Sasebo Chuo Station, Sasebo City, Nagasaki Pref.
 Main Use : space for walking and staying
 Keywords : Elevated scaffold retention urban

3. 足場の活用プロセス



3.1 一般の建設過程とまちの再建過程

まちを再建する足場も建設手段としての足場と同様のプロセスを踏む。唯一の相違点は、建設手段としての足場は建設終了と同時に解体されその場から姿を消すのに対して、まちを建設する足場はまちの再建・成長に合わせて形を変えて存在することである。まちに機能を与える手段として必要であれば足場は存在し続け、役目を終えれば姿を消す。単管足場の「組み立てが容易」で、「形態の自由度が高い」という長所を活かし建設手段としての足場をまちづくりに応用する。

3.2 単管足場の応用

単管足場の応用過程	00. 単管足場の活用性	<p>高架下の自由度の低い敷地において、側面に壁を配置すると、単にまちと高架下を分断してしまう。そこで、透過性のある足場を両側面（高架下とまちの境界）に組み込みのための空間を確保しつつも高架下に動線・視線が抜け、まちの魅力がにじみ出す空間をつくる。また、仮設性を持た形動的な自由度の高い足場はこの敷地に最適で、まちの成長、人の動きに合わせて変化していく。</p>	高架下	01. 梁・スラブの分解 <p>ひとつながりの梁を1本残し、それ以外の梁、スラブを柱のスパンに合わせて分解。</p>	02. 梁とスラブの断面・平面的操作 <p>梁とスラブの高さを動かし、平面的に広げたりして人のための空間をつくる。</p>
	高架台	01. スケールを拡大 <p>足場の形態はそのままにヒューマンスケールからビックスケールに拡大。展望の機能を加える。</p>	02. 角度を振る <p>高架下と観光資源（葉港・SSK・商店街）を向くように4つの足場に角度をつけて組み合わせる。</p>		

4. 高架下の配置計画

外国人 BAR 溢れ出しエリア <p>外国人 BAR が密集している区域に隣接する。夜のまちに隠れる外国人 BAR には見られない地元住民と米軍基地に暮らす人々の親密な関りを高架下に溢れ出させる。</p>	交差点エリア <p>大型商業施設からの動線と高架下が交わる部分であり、視認性を高め人々の興味を引き付ける。</p>	イベントエリア <p>近隣にビルやマンションが配置し、生活のための必然的な人の流れが見られる。生活動線の一部となっても屋外映画間やワークショップスペース、ブランコなどを設け人々を楽しませる。</p>	誘導エリア <p>駅に隣接しており、観光交通拠点エリアに最も近いエリア。平面的に広がりを持つ計画を行い高架下に多くの人を誘導する。また、高架下の小さな音楽ライブステージを設け人々を引き付ける。</p>
--	---	---	--

5. 模型写真



6. まとめ



沿線に組まれた、日常エリア（商店街）と観光交通拠点エリアを結ぶ足場建築は、その透過性を利用して、人の動線・視線、そしてまちの魅力を都市の余白に滲ませる。また、まちの活性化にどこにもある足場を用いることで、地域性がより重要視される。まちの成長に合わせて形態を変化させる足場は、人々に活性化の過程を体感させ関心を持たせる。そこにあるものや人を尊重したまちづくりは今後も続いていく。